慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際シンポジウム：「医療人類学の最前線VI：診断の揺らぎ 鬱のジェンダー&こどもの心と病～精神医学と人類学の対話から～」報告
Sub Title	
Author	照山, 絢子(Teruyama, Junko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	活動報告書 Vol.5, (2011.) ,p.38- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20120300-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

11 国際シンポジウム「医療人類学の最前線Ⅵ：診断の揺らぎ　鬱のジェンダー＆こどもの心と病～精神医学と人類学の対話から～」報告

開催日　2012年１月28日
企　画　北中淳子（哲学・文化人類学班）
講演者　Jonathan Metzl（Vanderbilt University）、照山絢子（ミシガン大学）、黒木俊秀（九州大学）、田中康雄（北海道大学）、堀口佐知子（テンプル大学）、宮坂敬三、北中淳子（哲学・文化人類学班）

文化人類学グループでは去る１月28日に、「診断の揺らぎ　鬱のジェンダー＆こどもの心と病」と題して三田でシンポジウムを開催した。二日前に開催された「統合失調症、人種、公民権運動：精神病をめぐる文化の政治学～ Jonathan Metzl 先生をお迎えして～」に引き続き「医療人類学の最前線」シリーズの第六回となる本シンポジウムは東日本大震災の影響で昨年度より延期されていたもので、今回満を持しての開催となった。医療・社会科学の各分野から50名の研究者が集まり、日米の精神科臨床におけるうつ病診断と、近年注目を浴びているこどもの心の病について、精神医学と文化人類学の立場からさまざまな知見が交わされた。

第一部の「鬱のジェンダー」においては慶大の北中淳子先生が、日本におけるうつ病がかつては働く男性において特に顕在化するものとされてきたのに対して、近年女性で診断を得るものが徐々に増えてきていることを指摘し、こうした展開を、長引く不況からくる徒労感と時代の不確実さという文脈に位置付けて分析を行った。一方、バンダービルト大学の Jonathan Metzl 先生は北米のうつ病の医療化において製薬業界が果たす役割の重要性について述べ、一般メディアや医療チャートにおけるうつ病の表象を分析することでジェンダーがその中でどのように捉えられているのかを考察し、医療化の過程・主体・社会的機能などについて日米のさらなる比較研究が求められていると呼びかけた。

第二部の「こどもの心と病」においては、まず国立病院機構肥前精神医療センターの黒木俊秀先生が、日本のこどものうつ病に対する親和性が指摘されている状況を受けて、その臨床的な表現型や大人のうつ病との連続性、薬物療法の効果と是非などに基づき、「こどものうつ病」という疾患概念とその診断に関する最新の知見について論じた。続いてテンプル大学の堀口佐知子先生が、「ひきこもり」当事者に対する医師による診断と当人のアイデンティティとの間の不一致を、「ひきこもり」に対する社会保障制度等の政策的な文脈に位置付けて考察した。次に北海道大学の田中康雄先生が、精神科医療の専門性という点に焦点をあて、特に発達障害について、診断におけるカテゴリ的なアプローチとスペクトラム的なアプローチを融合させつつ総体的な生きづらさや適応の困難さを汲んだ支援の重要性について論じた。最後に本拠点の照山絢子が発達障害を持つ成人当事者の語りから浮き彫りになる「当事者性」の在り様を、これまでの障害者運動におけるそれと比較しつつ紹介した。総括として慶應大の宮坂敬造先生にコメントをいただいた。

全体を通して、精神医学と人類学の両分野から心の病をめぐる多様な話題が提供され、領域の垣根を越えて充実した意見交換がなされたシンポジウムとなった。司会は一部・二部とも慶應大医療人類学の北中淳子先生が担当された。　（照山絢子）

As part of the Medical Anthropology Series, this symposium brought together various scholars from the fields of psychiatry and anthropology for an interdisciplinary dialogue on issues such as depression, social withdrawal and developmental disorders. The speakers were: Jonathan Metzl (Vanderbilt University), Junko Kitanaka (Keio University), Toshihide Kuroki (Hizen Psychiatric Center), Sachiko Horiguchi (Temple University), Yasuo Tanaka (Hokkaido University) and Junko Teruyama (University of Michigan) (in order of presentation). The discussant was Keizo Miyasaka of Keio University.